

米田信夫先生を送る

米 澤 明 憲（情報科学教室）

米田信夫先生に初めてお目にかかったのは、1970年の夏、清里村ではなかったかと記憶して居ります。当時、東大闘争が終り大学院に入ったばかりであった私は、Algol N 言語の設計とそのコンパイラーを作成するための合宿に何もわからず連れてこられていました。Algol N というのは、1960年頃ヨーロッパの研究者を中心にアルゴリズムの記述のために、論理的体系性を重視し設計されたプログラミング言語である Aogol 60 の後継者として日本で提案された言語です。米田先生は、当時この Algol N の設計の中心人物の一人でい

らしたわけですが、言語仕様の改訂を繰り返しつつ最終段階にあった言語に対して、まだ残る不統一な部分、設計原則からの逸脱をいらずら子のようにつぎつぎと指摘されていたのが印象的でした。しかし、それにも増して心に残ったのは、休憩の合い間に、食堂のホールにあったグランドピアノに向って、チャイコフスキーのピアノ協奏曲の冒頭の部分やショパンの小品を恥しそうに弾かれていた光景です。

米田先生といえば、すぐ頭に浮ぶのは、「米田の補題」です。私自身、数学をあまり知らないの

で、この米田先生のお仕事を深く味わうことができず、常々御一緒させていただきながら、大変残念で申し訳ないことだと存じて居ります。近年、プログラミング言語研究の基礎的部分で、カテゴリー理論を用いて理論を展開することが盛んに行なわれるようになりましたが、米田先生を信奉するこの分野の内外の研究者の多さに常に敬服するばかりです。中でも印象深いのは、1978年の夏、京都で開催された計算機科学の国際シンポジウムでの出来事です。シンポジウムの途中で、参加者各自が自己紹介をする機会があり、米田先生が“*My name is Yoneda. Once I was a categorist.*”と言われた途端、招待参加者の1人 Joseph Go-guen（現 Oxford 大学計算機科学科教授）が、“*Oh, That Yoneda*”と叫んで、一瞬床に片膝をついて、手を合せたのです。

「米田の補題」は先生がプリンストンの高等研究所におられた時代のお仕事とうかがって居ります。そのお仕事の結果について、パリを発とうとしている S. Mac Laue 教授に、北駅のベンチでの短い面接時間に話され、それによって同教授の教科書に Yoneda's Lemma として登場したそう

です。プリンストンから戻られた米田先生は、弥永昌吉先生に、「君は、これから計算機をやっているかどうか」を示唆され、以後、日本の計算機科学の研究者に深い影響を与えてられました。米田先生に接していつも感じるのは、具体的なものの世界に登場する種々のメカニズムに大変巾広い興味と、鋭い直観を備えていらっしゃる点です。弥永先生が米田先生のこの資質のより深い部分を見い出され、日本の計算機科学を指導するように勧められたのではないかと、浅見ながら推察致して居ります。それにしても、カテゴリー理論のような極度に抽象的な世界で大きな仕事をされた先生の御資質と、先生のもう一方の御資質は、いかに結びついているのでありましょうか？

さて、米田先生はこの3月に御還歴を迎えられ退官されるわけです。教室内の談話会や研究発表での、米田先生の明晰にして深い洞察のこもった質問やコメントを、これからは身近に拝聴できなくなるのは、私のみならず教室全体の大きな傷手です。このような愚痴をいっているのは、米田先生にお叱りを受けそうですが……。